

新漢字表試案に対する意見書

新漢字表試案に対する社団法人日本書籍出版協会としての意見をまとめましたのでここに提出いたします。

1 「新漢字表試案」の性格について

「当用漢字表」の制限的な性格を改め目安とした点は、国語の表記が普通、漢字仮名まじり文で書き表されていることからすれば、一応妥当であると考ええる。その運用についても、漢字・漢語の行き過ぎた仮名書き、まぜ書き、書き替えを是正しようという意図は賛成できる。しかし、この表が実施されれば、一般にはこの表の範囲内で制限的に用いられることが容易に推測されるので、書き替えについて、慣用の定着しているもの、揺れているもの、そうでないもの、などに関し国語審議会としての報告が必要であると考ええる。

また学校教育での漢字指導について、十分な検討と対策が同時に行われる必要がある。特に字音の習得についての配慮が望ましい。教育漢字の字種、音訓、字体、学年別配当などの改定については、選定の方針を明らかにし、事前に改定案を公表して各方面の意見を徴すべきである。

2 字種選定方針について

選定の方針は、おおむね妥当であるが科学、技術、芸術などの各種専門分野の使用の実態をも考慮して、一九〇〇字にこだわらず、通用性を主とする観点から選定すべきであり、多少試案よりふえるのもやむを得ない。また、他の文字で代用し得ない、または代用しにくい文字についても、十分配慮した選定を行うべき

である。

3 個々の字種について

出版は一般の社会生活に深くかわわっている各種専門分野を擁している。それぞれの専門分野の用字で、一般の生活用語に属している文字は、可能な限り選定されることが望ましい。

学術・専門書を出版している各会員社から、選定方について検討の要望のあった文字の具体例については別表として掲げた。

4 字体について

新漢字表を告示するときは、明朝漢字の字体と共に、楷書体の活字の字体をも同時に示すべきである。字体整理の基準は、現行の「当用漢字字体表」を踏襲せざるを得ないであろう。しかし、活字のデザインなどによる差異を、字体の揺れとして、その許容範囲を明示する必要がある。

表外字の字体については、新漢字表との関連からその字体整理の範囲と限度などに関し具体的な方針を示すことが望ましい。今回削除される字の字体についても方針も、明らかにする必要がある。

また、当用漢字の字体整理によって生じた混乱に鑑み、部首・画数についての基準も同時に示すべきである。

5 音訓について

「榮・憩・香・愁・氷・謡」については動詞の訓が追加されたことについては賛成である。また「膚」の訓の削除、「露・和」の音の追加も賛成である。

音訓のこれ以上の増加については慎重であるべきであるが、「易・やすい」「画えがく」「看・みる」「眼・め」「孔・あ

な」「止・やむ」「疎・まばら」「達・タチ」「凸・でこ」「凹・ぼこ」などは追加すべきである。

なお、音訓の追加および削除に当たっては、まとめて別に示すべきである。

6 その他

①「現代かなづかい」には、助詞の「を、は、へ」の取扱いの不統一、「お」と発音される「ほ」とオ列長音との扱いとの矛盾、二語の連合の扱いなど、検討すべき問題があるので、早急に審議を始めることを期待する。

②従来の振り仮名使用の制限を緩和したことは賛成であるが、説明資料の中で「安易な使い方はすべきではないと考えらる」としているのは不明確であり、制限的に受けとられるおそれがあるので、読みにくい場合に用いるという原則だけで十分である。なお、振り仮名は語単位として施す原則を明示することが望ましい。

③地名・姓・名前等の固有名詞について方針をたてる場合も、あらかじめ一般に公表し、広く意見を徴すべきである。

④以上、当協会としての基本的な考え方を意見書にまとめ提出したが、字種・字体については継続して検討を行い、意見のある場合は追加提出を行いたい。

附表

(1) 加えたい字の例

- 埃 幹 臆 瓜 拐 瓦 龜 稀 僅
- 杭 釘 桁 勾 頃 叉 棧 杖 壤
- 塵 脊 捉 堆 棚 誰 爪 吊 搭
- 句 爬 煤 剝 莫 汜 埠 蔽 頁
- 哺 枕 抹 梁 梓 碗 碗

(2) 削りたい字の例

璽

(3) 残したい字の例(当用漢字表にあって試案で削られた字について)

- 芋 翁 堪 藪 薪 鍾 奴 婆 畔
- 濫 隸

他に、試案で削られた三三字すべてを残したいとの意見もあった。

以上